それから、勉強の予定はなかなか進んでくれない。
英語の単語帳をぺらぺらめくりながら、
「まだ、あと七枚。」、
「もう、少しで六枚。」と
一人で元気つけてやる。
試験前になると、いつも後悔する事だが、
今度も同じ事。
「ああ、常日頃やっておくべきだった。
塵も積もれば山となる。」
と、寝ながら、鉛筆を走らす。
「誰か、僕の変わりに勉強してくれて、
その頭を取り替えられたらなあ。」と思う。
外はだいぶ薄暗くなって来た。
何の気なしに、下に降り、京太に背を測ってもらう。
京太にはばれない様に、少し、つま先に力入れた。
かかとを浮かせると、一メートル六十九点七センチ。
「寝ると伸びるなあ。」と
僕が関心そうに言うと、
「けど、また、すぐ、縮むやろう。」
と京太が言う。

萩原良昭